

# 第 6 章

## 家族のQOLの特徴

菅原 ますみ



第 1 章

第 2 章

第 3 章

第 4 章

第 5 章

第 6 章

資料編

## 家族のQOLの経年比較

この節では、生活のさまざまな側面（心身の健康、対人関係、近隣や住居環境など）の良質さや満足度をあらわすクオリティ・オブ・ライフ（QOL）について、2006年と2011年の2時点の調査結果の特徴を比較する。

### 夫婦のQOL指数は上昇傾向

本調査では、回答者の生活の良質さや健康さを評価する指標として、国際連合世界保健機関（WHO）が定義する「健康」（身体的、精神的、社会的に良好な状態にあること）の概念に沿って作成された、『WHO QOL26』を調査に取り入れている<sup>\*1)</sup>。本節では、2006年と2011年のQOL値の比較を行った結果について報告する。

『WHO QOL26』は、26の項目からなり、全体的な生活の質について問う2項目（生活の質の自己評価・健康状態への満足感）と、身体的領域7項目（痛みや不快感のための制約感・治療（医療）の必要度・活力の程度・外出の程度・睡眠の満足感・活動をやり遂げる能力への満足感・仕事をする能力への満足感）、心理的領域6項目（生活の楽しさ・生活に対する有意味感・集中力・外見（容貌）への評価・自己満足感・抑うつ感）、社会的領域3項目（人間関係への満足感・友人サポートへの満足感・性生活への満足感）、環境領域8項目（安全性・生活環境の健康さ・経済的状态・情報取得の充実度・余暇・近隣環境への満足感・医療施設や福祉サービスの利用しやすさ・周辺の交通への満

足感）の4領域について問う項目に分かれている。回答者は、それぞれの項目について、5段階の選択肢からもっとも自分の状況に近いものを選ぶ。たとえば、身体的領域に関する項目「睡眠は満足のいくものですか」について、「非常に満足」から「まったく不満」までの選択肢が用意されており、そこからもっともふさわしいもの1つを選ぶ。

図6-1-1は、妊娠期の妻・夫それぞれのQOL指数（26項目すべての回答結果を加算し項目数で割ったもの）を経年比較したものである（1項目でも無答不明の人は除いている）。2006年・2011年とも妻のほうが夫よりも高い値を示し、また妻も夫も2006年と比較して2011年のほうが高い値を示している（妻2006：3.46 < 妻2011：3.52、夫2006：3.42 < 夫2011：3.48）。『WHO QOL26』で設定されている4領域（身体的領域、心理的領域、社会的領域、環境領域）ごとの領域平均値を図6-1-3から図6-1-6に示したが、夫の心理的領域の平均値（図6-1-4）以外では、夫婦ともに2006年より2011年の平均値のほうが高く、妊娠期の夫婦が実感する生活の良質さの評価は、5年前と比較して総じて上昇している傾向がうかがわれる結果となった。

\*1) 『WHO QOL26』質問項目は、出版元、株式会社金子書房の許可を得て使用している。

図6-1-1 QOL指数（経年比較）

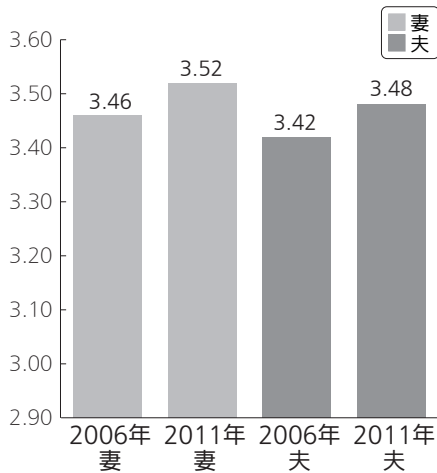


図6-1-2 全体評価（経年比較）

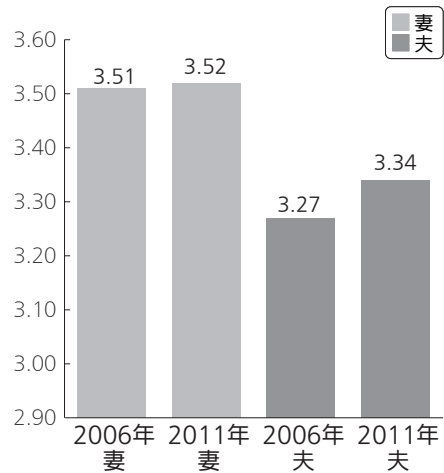


図6-1-3 身体的領域（経年比較）

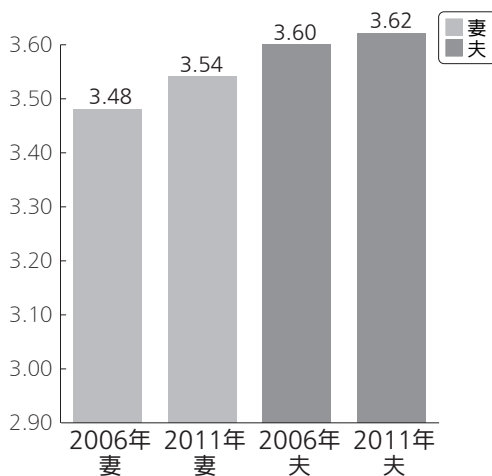


図6-1-4 心理的領域（経年比較）

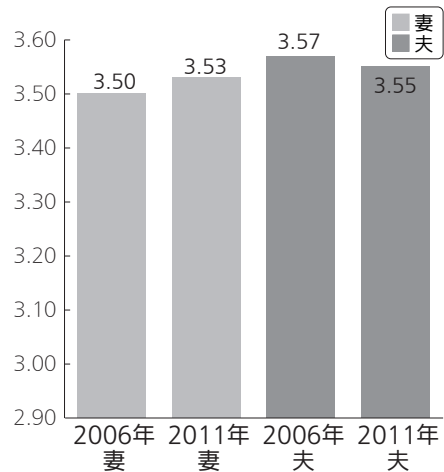


図6-1-5 社会的領域（経年比較）

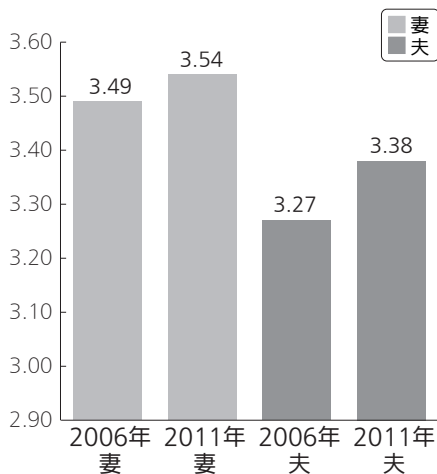
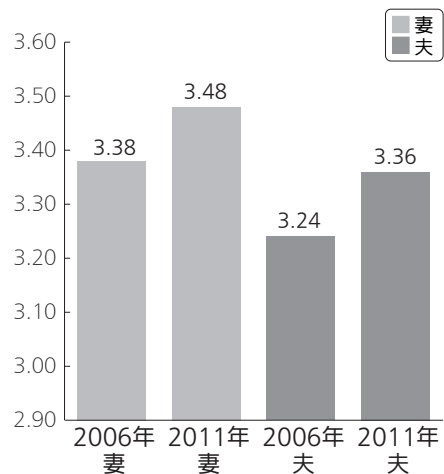


図6-1-6 環境領域（経年比較）



注1)「QOL指数」は、QOL全項目(26項目)の回答平均値。

注2)「全体評価」「身体的領域」「心理的領域」「社会的領域」「環境領域」は、それぞれの領域項目の回答平均値を出した。

注3)1項目でも無答不明の人は除く。

育児期についても同様な傾向がみられ（図6-1-7~12）、各領域について夫婦ともに2011年の数値は2006年よりもすべて高かった。QOL指数についても2006年・2011年とも妻のほうが夫よりもやや高い値を示し、また妻も夫も2006年と比較して2011年のほうが高い値を示している（妻2006：3.39 < 妻2011：3.46、夫2006：3.35 < 夫2011：3.44）。

また、妊娠期と育児期の値を比較すると、妻の身体的領域以外では育児期のほうがいずれも低めの値となっている。妊娠にともなう妻の身体的負担の大きさは育児期に勝るものがあるものの、総じて出産後の生活は妊娠中よりも妻・夫ともにさまざまな側面で苦勞の多いものであることがうかがわれる。

#### 子どものQOLの経年変化

0歳から2歳までの子どものQOLについては、親に実施した『WHO QOL26』の領域や項目を参考にして表6-1-1の9項目を作成し、育児期の妻に回答を依頼した。回答は「あてはまる」～「あてはまらない」の5段階である。2006年と2011年の平均値を比較したところ、5項目で有意な差がみ

られた。

身体的健康領域に関する2項目（「○○ちゃんは毎日の生活の中で治療（医療）がかなり必要な状況である」「○○ちゃんは体の痛みや不快感のせいで、遊びや活動が制限されている」）は2006年よりも2011年の値のほうが若干低くなっており、健康に関してはより望ましい方向に得点に変化していることがうかがえる。社会的領域では「父親と過ごす楽しい時間を持っている」で2011年のほうが高い値となった。本報告書の第3章で、この5年間で父親の子育て関与が増加傾向にあることが報告されているが、そのことを反映した結果であり、母親の目からみても子どもが父親と過ごす時間がより増加していることがよみとれる。環境領域の項目である「○○ちゃんは必要なだけの絵本やおもちゃを持っている」も2011年のほうが若干高い値となっているが、「○○ちゃんは毎日の生活の中で、お散歩（外出）を楽しんでいる」では2006年よりも2011年のほうが低い値となっており、2011年3月の東日本大震災以降の余震や原子力発電所事故による放射能汚染に関するホットスポット情報などの影響が関連している可能性も考えられよう。

表6-1-1 子どものQOL項目の経年比較 

	2006年		2011年
1. ○○ちゃんは毎日を元気に楽しく過ごせている	4.72		4.75
2. ○○ちゃんに必要なだけの絵本やおもちゃを持っている	4.39	<	4.46
3. ○○ちゃんは毎日の生活の中で、お散歩(外出)を楽しんでいる	4.50	>>	4.40
4. ○○ちゃんには一緒に遊べるお友だちがいる	3.57		3.53
5. ○○ちゃんは母親（あなた）と過ごす楽しい時間を持っている	4.45		4.48
6. ○○ちゃんは父親と過ごす楽しい時間を持っている	3.85	<<	4.02
7. ○○ちゃんは毎日の生活の中で治療(医療)がかなり必要な状況である	1.32	>>	1.24
8. ○○ちゃんは体の痛みや不快感のせいで、遊びや活動が制限されている	1.09	>	1.07
9. ○○ちゃんは毎日の生活の中で、落ち着いて遊びに集中できる環境にある	4.46		4.50

注1)「わからない」と回答した人、無答不明の人を除く。

注2) 数値は、平均値。<>は、5%水準での有意差、<<>>は、1%水準での有意差を示す。

図6-1-7 QOL指数（経年比較）

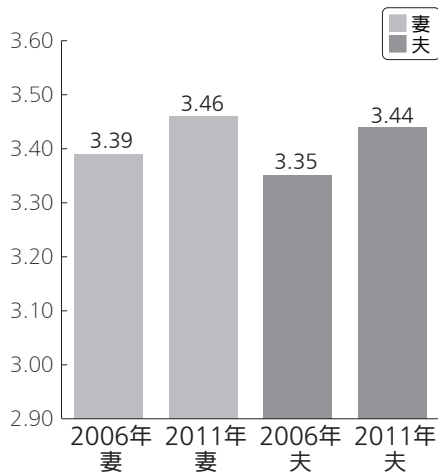


図6-1-8 全体評価（経年比較）

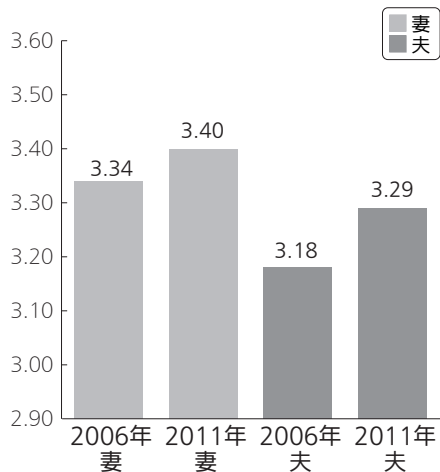


図6-1-9 身体的領域（経年比較）

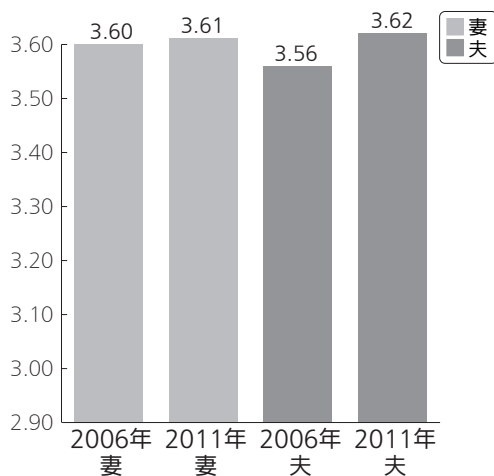


図6-1-10 心理的領域（経年比較）

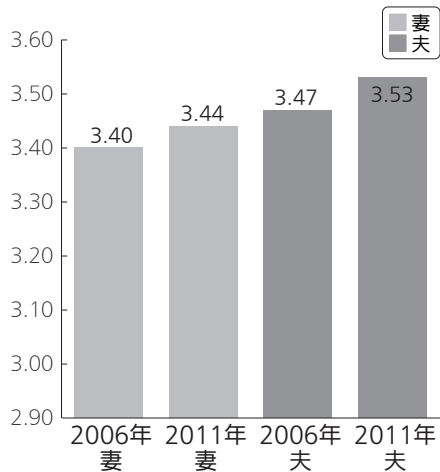


図6-1-11 社会的領域（経年比較）

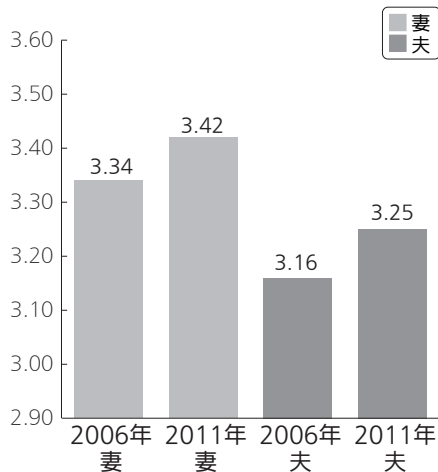
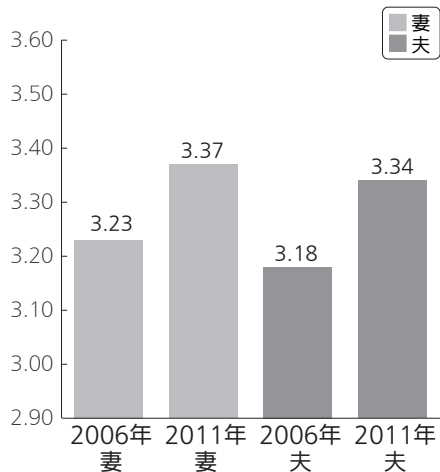


図6-1-12 環境領域（経年比較）



注1)「QOL指数」は、QOL全項目(26項目)の回答平均値。

注2)「全体評価」「身体的領域」「心理的領域」「社会的領域」「環境領域」は、それぞれの領域項目の回答平均値を出した。

注3)1項目でも無答不明の人は除く。

## QOLの上昇に関連する要因

前節で2006年から2011年へとQOLは上昇傾向にあることを示したが、何が生活の質の評価や満足度の上昇と関連しているのだろうか。本節ではQOLの各項目の経年比較を通じて関連要因を探索する。

### 夫婦のQOLの上昇に関連する要因

表6-2-1に妊娠期・育児期の夫婦それぞれの26項目の経年比較の結果を示したが、夫婦とも妊娠期も育児期も環境領域の項目の上昇が目立つ。とくに環境領域の「24. 家と家のまわりの環境に満足していますか」（妊娠期妻2006：3.45 < 妊娠期妻2011：3.63、妊娠期夫2006：3.41 < 妊娠期夫2011：3.59、育児期妻2006：3.33 < 育児期妻2011：3.50、育児期夫2006：3.38 < 育児期夫2011：3.51）と、「25. 医療施設や福祉サービスの利用のしやすさに満足していますか」（妊娠期妻2006：2.98 < 妊娠期妻2011：3.22、妊娠期夫2006：2.91 < 妊娠期夫2011：3.17、育児期妻2006：2.99 < 育児期妻2011：3.34、育児期夫2006：2.99 < 育児期夫2011：3.23）の2つの項目は、妊娠期・育児期の妻・夫すべてで2006年よりも2011年の値のほうが高くなっている。2003年7月に次世代育成支援対策推進法が成立してから今日に至るまで、国や地方公共団体などを中心とした子育て支援施設の充実が進行しつつあるが、2006年から2011年への5年間にもその効果が当該の親たちの実感としてとらえられるようになってきた可能性も考えられよう。

環境領域以外の項目でもいくつかの項目で

上昇がみられる。対人関係満足度に関する社会的領域の「17. 性生活に満足していますか」でも妊娠期・育児期の夫婦ともに2011年のほうがより高い値を示している（妊娠期妻2006：3.10 < 妊娠期妻2011：3.19、妊娠期夫2006：2.93 < 妊娠期夫2011：3.15、育児期妻2006：3.04 < 育児期妻2011：3.11、育児期夫2006：2.86 < 育児期夫2011：2.94）。どのような原因がこの項目の上昇に寄与したかは不明であるが、本報告書第3章で分析しているような夫の子育て参加の増加や、2011年3月11日の東日本大震災を経て家族のきずなをよりいっそう重要なものと認識する傾向が深まったことも関連しているのかもしれない。

育児期の妻・夫ともに社会的領域の項目「18. 友人たちの支えに満足していますか」でも2011年のほうが高い値となっていることや（妻2006：3.64 < 妻2011：3.73、夫2006：3.35 < 夫2011：3.47）、全体評価の項目「2. 自分の健康状態に満足していますか」でも有意な上昇がみられていることも（妻2006：3.32 < 妻2011：3.39、夫2006：3.15 < 夫2011：3.25）、子育て中の夫婦の孤立や疲弊が若干緩和する方向にあることを示唆するものと考えられ、特筆すべき傾向であるといえよう。

表6-2-1 WHO QOL 26 各項目平均値 (経年比較)

妊娠(妻) 妊娠(夫) 育児(妻) 育児(夫)

	妊娠期妻		妊娠期夫		育児期妻		育児期夫	
	2006年	2011年	2006年	2011年	2006年	2011年	2006年	2011年
全体評価								
1.自分の生活の質をどのように評価しますか	3.52	3.50	3.36	3.40	3.36	3.41	3.21	<< 3.33
2.自分の健康状態に満足していますか	3.50	3.55	3.19	3.29	3.32	< 3.39	3.15	< 3.25
身体的領域								
3.体の痛みや不快感のせいで、しなければなら ないことがどのくらい制限されていますか	2.62	> 2.51	1.67	1.62	1.72	1.71	1.57	1.52
4.毎日の生活の中で治療(医療)がどのくらい 必要ですか	1.95	> 1.82	1.62	1.62	1.52	1.51	1.49	1.47
5.毎日の生活を送るための活力はありますか	3.76	3.72	3.71	3.76	3.62	3.64	3.59	< 3.68
6.家の周囲を出まわることがよくありますか	3.37	3.34	3.20	3.26	3.65	3.60	3.00	<< 3.17
7.睡眠は満足のいくものですか	3.45	3.48	3.07	3.12	2.96	3.00	3.00	3.05
8.毎日の活動をやり遂げる能力に満足していま すか	3.24	3.30	3.29	3.29	3.17	3.18	3.22	3.25
9.自分の仕事をやる能力に満足していますか	3.10	<< 3.24	3.21	3.13	3.06	3.05	3.15	3.19
心理的領域								
10.毎日の生活をどのくらい楽しく過ごしていま すか	3.53	3.58	3.53	3.56	3.55	3.60	3.36	<< 3.46
11.毎日の生活をどのくらい意味あるものと感じ ていますか	3.71	3.71	3.68	3.63	3.70	3.71	3.53	< 3.61
12.物事にどのくらい集中することができますか	3.35	< 3.42	3.62	3.54	3.13	3.19	3.48	3.49
13.自分の容姿(外見)を受け入れることができ ますか	3.51	3.52	3.51	3.49	3.18	3.23	3.41	3.44
14.自分自身に満足していますか	3.35	3.36	3.25	3.24	3.11	3.11	3.15	3.21
15.気分がすぐれなかったり、絶望、不安、落ち 込みといったいやな気分をどのくらいひんば んに感じますか	2.44	2.39	2.18	2.13	2.27	> 2.21	2.14	2.03
社会的領域								
16.人間関係に満足していますか	3.55	3.60	3.35	3.41	3.34	< 3.42	3.27	3.34
17.性生活に満足していますか	3.10	< 3.19	2.93	<< 3.15	3.04	< 3.11	2.86	< 2.94
18.友人たちの支えに満足していますか	3.82	3.83	3.53	3.58	3.64	<< 3.73	3.35	<< 3.47
環境領域								
19.毎日の生活はどのくらい安全ですか	3.86	3.91	3.68	3.74	3.85	< 3.91	3.69	<< 3.79
20.あなたの生活環境はどのくらい健康的ですか	3.60	3.56	3.38	3.46	3.59	3.62	3.36	< 3.46
21.必要なものが買えるだけのお金を持ってい ますか	3.11	< 3.23	2.92	2.96	3.01	< 3.09	2.79	<< 2.93
22.毎日の生活に必要な情報をどのくらい得るこ とができますか	3.48	< 3.56	3.44	3.53	3.37	<< 3.45	3.36	< 3.45
23.余暇を楽しむ機会はどのくらいありますか	3.38	3.41	2.98	< 3.11	2.59	<< 2.75	2.76	<< 2.95
24.家と家のまわりの環境に満足していますか	3.45	<< 3.63	3.41	<< 3.59	3.33	<< 3.50	3.38	<< 3.51
25.医療施設や福祉サービスの利用しやすさに満 足していますか	2.98	<< 3.22	2.91	<< 3.17	2.99	<< 3.34	2.99	<< 3.23
26.周辺の交通の便に満足していますか	3.17	<< 3.33	3.20	3.32	3.12	<< 3.28	3.15	<< 3.36

注1) 数値は、平均値。無答不明の人は除く。< >は、5%水準での有意差、<< >>は、1%水準での有意差を示す。

注2) 本表での設問項目は、『WHO QOL 26』を分析用に領域別に並びかえて図示している。



## 環境領域 QOL と子育て環境の利便性

2006年から2011年へのQOL指数の上昇には環境領域の値の上昇が相対的に大きく寄与していたが、子育て環境の利便性の向上がそのことと関連をもっているのだろうか。この点について、2006年と2011年の育児期妻のデータを分析することによって検討を試みる。

子育て環境の利便性については、「あなたのご近所（徒歩20分程度までの歩いて行ける範囲）の様子についておうかがいします」という教示について、「お散歩できるような公園や遊歩道など」「公共の子育て支援施設（保健所、保育所、ファミリーサポートセンターなど）」「小児科や子どもを診てくれる病院」「自分のことを診てくれる産婦人科や助産院」「おむつや粉ミルク、離乳食などを買える店」の5項目でたずねた。「近所がないので、非常に困っている」「近所がないので、困っている」「近所がないので、やや困って

いる」「近所はないが、あまり困っていない」「近所にある」の5つの選択肢のうち1つを選んで回答してもらった。表6-2-2に示したように、2006年との共通設問である4項目で見ると、すべてで2006年から2011年へと「近所にある」と回答した人数が上昇している。

4項目について2011年で近所に「ある」と回答した人を近所にある群、近所には（その施設が）「ない」と回答した人を近所のない群とし、対応すると考えられるQOLの環境項目との関連をみたのが図6-2-1から図6-2-4である。いずれの項目でも近所にある群のほうが近所のない群よりもQOL環境領域の該当項目に満足している（「非常に満足」+「満足」）割合が高くなっており、子育て環境の利便性の上昇が子育て期にある妻の身近な環境に関する満足度の経年変化に影響した可能性が示唆されるといえよう。

表6-2-2 子育て環境の利便性（経年比較）



育児期(妻)

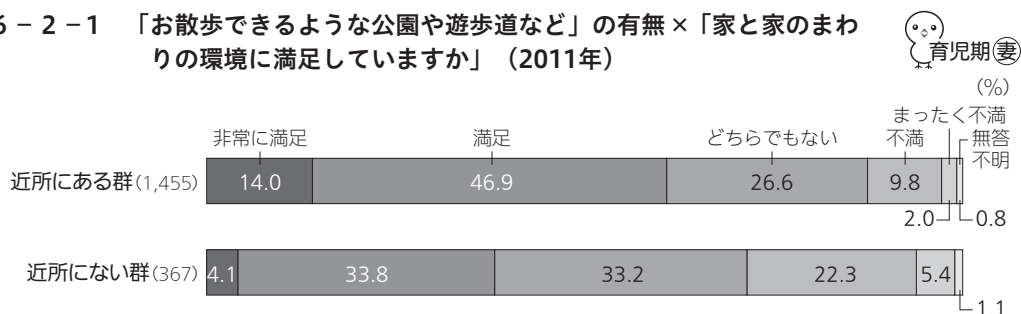
近所（徒歩20分程度までの歩いて行ける範囲）に、	2006年	2011年
1. お散歩できるような公園や遊歩道などがある	74.9	78.9
2. 公共の子育て支援施設（保健所、保育所、ファミリーサポートセンターなど）がある	56.8	60.2
3. 小児科や子どもを診てくれる病院がある	68.4	72.5
4. 自分のことを診てくれる産婦人科や助産院がある	37.0	40.1

注1) 「近所にある」の%。

注2) 5項目中、4項目を図示。

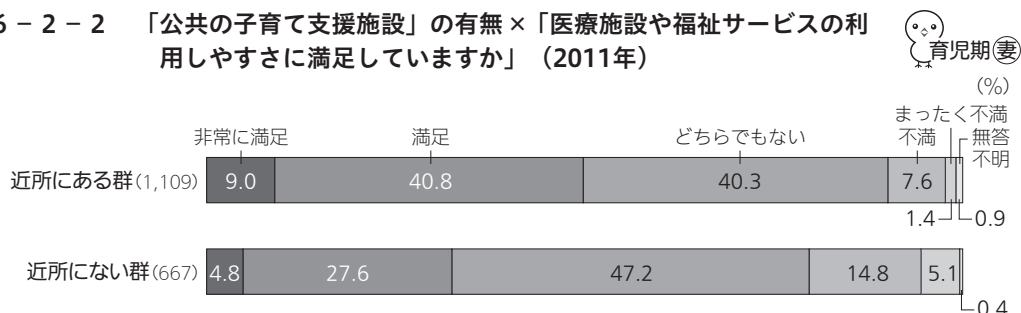


図6-2-1 「お散歩できるような公園や遊歩道など」の有無×「家と家のまわりの環境に満足していますか」(2011年)



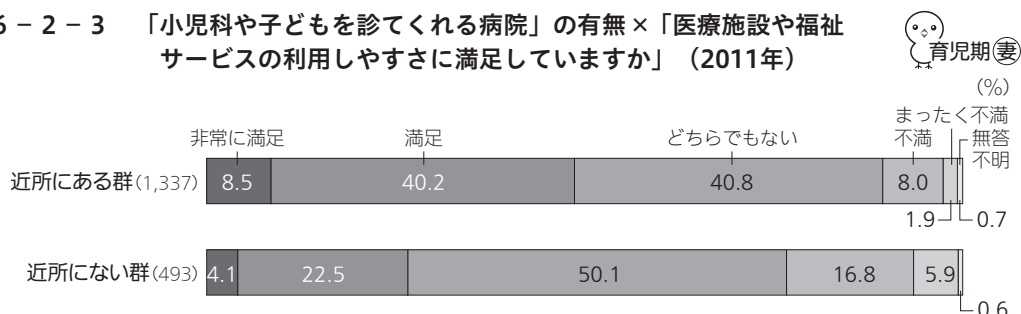
注1) 「お散歩できるような公園や遊歩道など」について、「近所にある」と回答した人を「近所にある群」、「近所のない」を含む選択肢を回答した人を「近所のない群」とした。  
注2) ( ) 内はサンプル数。

図6-2-2 「公共の子育て支援施設」の有無×「医療施設や福祉サービスの利用しやすさに満足していますか」(2011年)



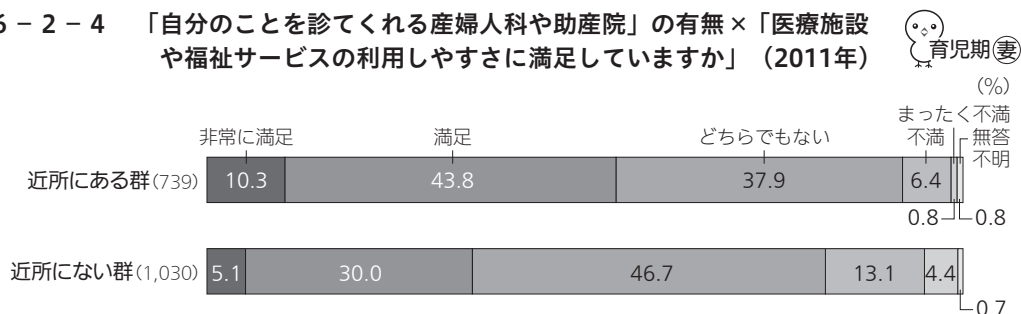
注1) 「公共の子育て支援施設(保健所、保育所、ファミリーサポートセンターなど)」について、「近所にある」と回答した人を「近所にある群」、「近所のない」を含む選択肢を回答した人を「近所のない群」とした。  
注2) ( ) 内はサンプル数。

図6-2-3 「小児科や子どもを診てくれる病院」の有無×「医療施設や福祉サービスの利用しやすさに満足していますか」(2011年)



注1) 「小児科や子どもを診てくれる病院」について、「近所にある」と回答した人を「近所にある群」、「近所のない」を含む選択肢を回答した人を「近所のない群」とした。  
注2) ( ) 内はサンプル数。

図6-2-4 「自分のことを診てくれる産婦人科や助産院」の有無×「医療施設や福祉サービスの利用しやすさに満足していますか」(2011年)



注1) 「自分のことを診てくれる産婦人科や助産院」について、「近所にある」と回答した人を「近所にある群」、「近所のない」を含む選択肢を回答した人を「近所のない群」とする。  
注2) ( ) 内はサンプル数。

### 第3節

## 夫婦の子育て肯定感と 子どものQOL

親自身が子育てに対して楽しさや充実感などの肯定的な気持ちを持てることは、忙しい日々のなかでも子どもにかかわるゆとりや意欲の源となり、子どもにとっての養育環境の良質さに影響すると予想される。本節では、育児期の夫婦の子育て肯定感を支える要因についてみていく。

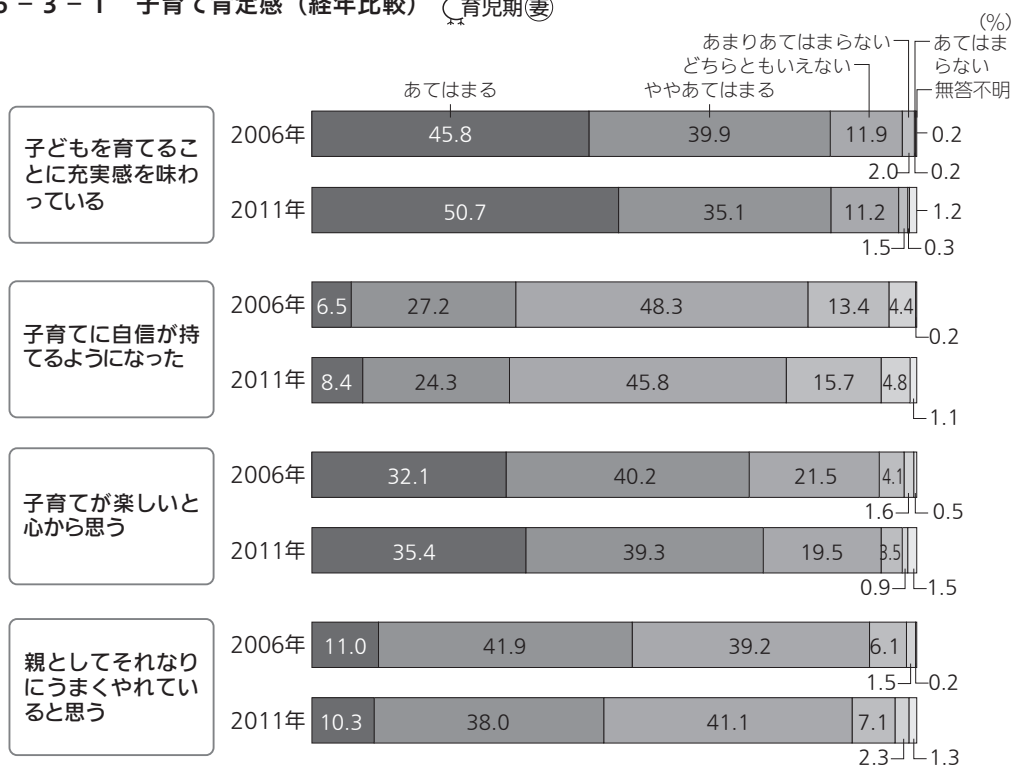
#### 育児期の夫婦の子育て肯定感

育児期の妻、夫それぞれに、「子どもを育てることに充実感を味わっている」「子育てに自信が持てるようになった」「子育てが楽しいと心から思う」「親としてそれなりにうまくやれていると思う」の4項目（「あてはまらない」～「あてはまる」の5つの選択肢）で子育てに対する肯定的な気持ちをたずねた。2006年と2011年の回答結果を図6-3-1と図6-3-2に示したが、妻、夫とも経年の変化はほとんどなく、同様な値で推移している。「子どもを育てることに充実感を味わっている」（「ややあてはまる」＋「あてはまる」）妻は2006年85.7%＜2011年85.8%、夫は2006年83.8%＜2011年87.1%と高い値となっており、調査に参加した大多数の親たちは子育てに張り合いや生きがいを感じていることがわかる。「子育てが楽しいと心から思う」親も7割以上に上る。しかし一方で、心から楽しいとは感じられないという親が2割以上（「どちらともいえない」

＋「あまりあてはまらない」＋「あてはまらない」）、「子どもを育てることに充実感を味わっている」と感じられない親が1割以上いることも留意すべきであり、どんな原因によってそうした心境に至っているのか、子育てを楽しく思えないことが親自身や子どもにどんな影響があるのか丁寧にみていく必要がある。大多数の親が子育てを肯定的にとらえているなかで、前向きな気持ちを持ってないことを人には打ち明けにくいものと予想され、悩みを抱え込んでいる可能性もあるだろう。

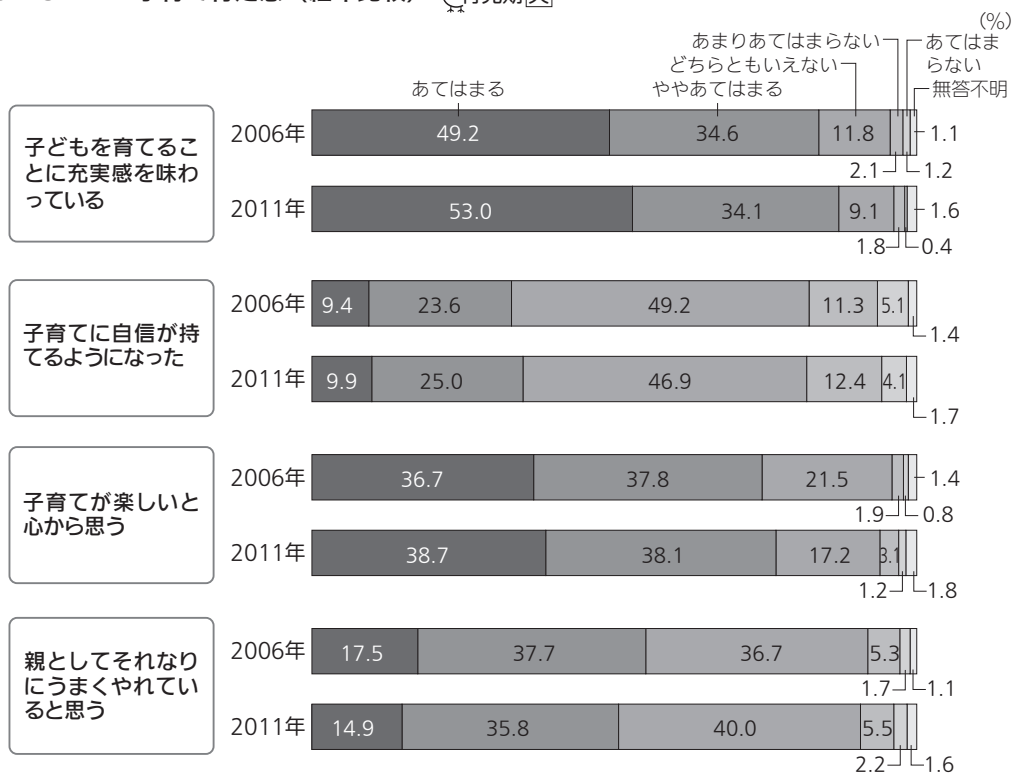
親としての自信や自己評価は全体にそれほど高くなく、「子育てに自信が持てるようになった」としているのは夫婦ともに3割程度、「親としてそれなりにうまくやれている」と自己評価しているのは5割前後で、ここにも経年の変化はほとんどみられなかった。第1子の子育てのスタート期であり、親としての自信は今後の子どものとの生活のなかで少しずつ形成されていくものと予想される。

図6-3-1 子育て肯定感（経年比較）



注) 8項目のうち、肯定的感情を表す4項目を図示。

図6-3-2 子育て肯定感（経年比較）



注) 8項目のうち、肯定的感情を表す4項目を図示。

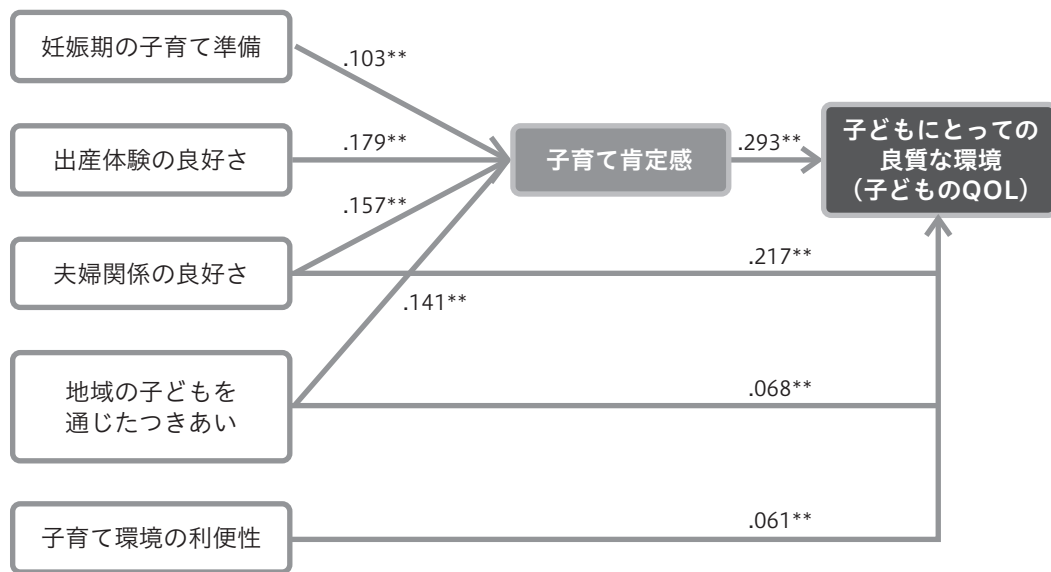
### 子どもの QOL と子育て肯定感との関連

図 6-3-3 と図 6-3-4 に示すように、妻、夫それぞれの子育て肯定感に関する 4 項目の合算得点は、子どもの QOL (P.108 表 6-1-1 参照) と有意に関連しており(妻、夫とも 2006 年と 2011 年の統合データを用いたパス解析\*1)を行っている)、親が子育てに前向きな気持ちをどのくらい持つことができているかによって子どもの養育環境の良好さが異なるものになる可能性が示唆された。また親の子育て肯定感には図のように、妊娠期の子育て準備(母親学級への参加や育児書を読むなど)や出産体験の良好さ(リラックスした分娩であったかどうか)、夫婦関係の

良好さ、地域の子どもを通じたつきあいの多さや前節でみた子育て環境の利便性など、多様な要因が関連している。とくに夫は、育児頻度が高いほど子育てに対する肯定感が高い傾向にあることが示され、育児期初期からの父子の接触頻度の重要性があらためて確認されたといえよう。また、妻に比べて夫の子育てへの肯定感はより強く夫婦関係と関連しており(関連の強さを推定する標準偏回帰係数は、妻では 0.157、夫は 0.312)、育児期初期での夫婦間の良好なサポート関係は、父親の子育てに対する肯定感を經由して子どもの QOL の良好さに影響する重要な要因の 1 つであるといえるだろう。

\*1) パス解析とは、複数の要因(さまざまな子育てをめぐる体験や夫婦間や地域のサポート要因)と結果(子育てに対する肯定感および子どもの QOL)の関係を要因間の因果の流れを仮定したモデル図に沿って解析する方法である。

図6-3-3 育児期妻の子育て肯定感と子どものQOL

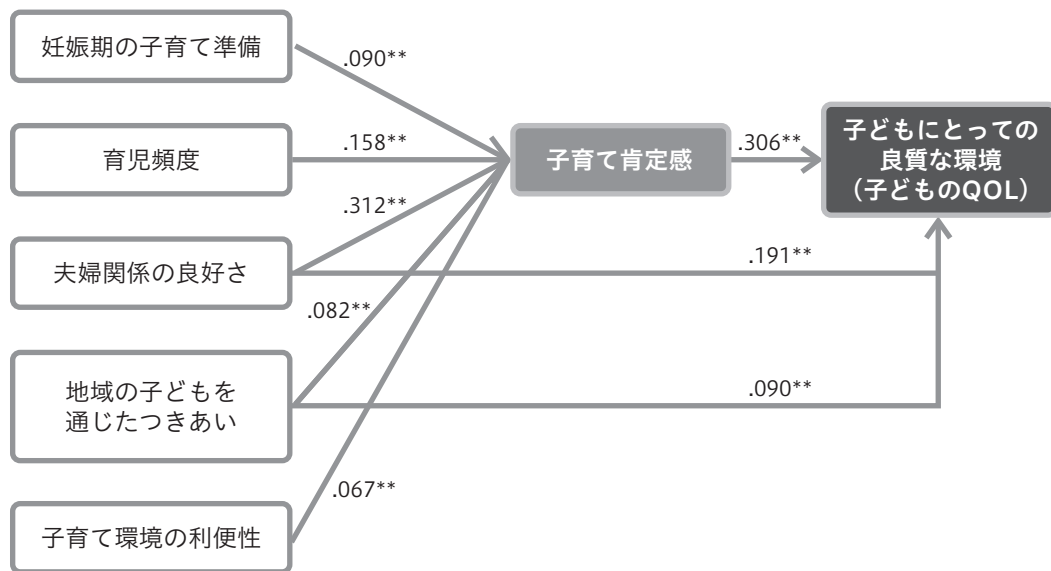


\*\* : p<.01

注1) 図にあげた5項目(妊娠期の子育て準備・出産体験の良好さ・夫婦関係の良好さ・地域の子どもを通じたつきあい・子育て環境の利便性)は、子育て肯定感や子どものQOL(子どもにとっての良質な環境)に影響をおよぼす要因である。値(標準偏回帰係数)が大きいかほどその要因の影響力が強いことを示す。

注2) 2006年と2011年のデータを合わせて集計。母親の就労の有無・年齢・最終学歴・世帯年収・子どもの性別・子どもの年齢という条件、および実施年の違いが結果に影響をおよぼさないよう統制して算出している。

図6-3-4 育児期夫の子育て肯定感と子どものQOL



\*\* : p<.01

注1) 図にあげた5項目(妊娠期の子育て準備・育児頻度・夫婦関係の良好さ・地域の子どもを通じたつきあい・子育て環境の利便性)は、子育て肯定感や子どものQOL(子どもにとっての良質な環境)に影響をおよぼす要因である。値(標準偏回帰係数)が大きいかほどその要因の影響力が強いことを示す。

注2) 2006年と2011年のデータを合わせて集計。妻の就労の有無・年齢・最終学歴・世帯年収・子どもの性別・子どもの年齢という条件、および実施年の違いが結果に影響をおよぼさないよう統制して算出している。